

御国の完成に関する黙想

— 荒野の誘惑における拒絶と選択、義の実現の道 —

鈴ヶ峰キリスト福音館

聖書研究会 考察

2025. 7. 18

ルカの福音書 4 章

序章

ルカ 4 章に記された荒野の三つの誘惑は、主イエスの公生涯の始まりにおいて、御国の完成に向けた霊的設計図が主の拒絶と選択によって顕された場です。主は「御霊に導かれて荒野に向かわれ」（ルカ 4:1）、民の求めではなく、父なる神の御心の成就を御旨とされて歩み始められました。

誘惑の言葉には、神の子として立たれる主に、民の望む救済者像を引き受けよと迫る霊的誤導が響いています。パンを与え、権威を得、奇跡によって証しする。それらは、民の満たしを目的としつつ、預言されてきた御子に関する聖書のことば、すなわち父の定めた方法を除きながら御国の完成を目指そうとする欺きの提案です。

主はそれを拒み、しもべとしての苦難の道に従うことによってのみ、命のパンとなり、すべての権威を与えられ、復活によって神の子と証されるという霊的な働きを全うされました。ここでは、この逆説的な歩みを三つの誘惑を通して辿り、御国の完成が、民の歓呼ではなく神の誓願によって成されることを深く味わいたいと思います。

まず、義の実現について先に目を留めます。

ヨハネの「義の実現」としもべの苦難の道

ルカ 3 章でヨハネが主イエスに語った「義の実現」（マタイ 3:15 参照）という言葉は、神の義が人間の罪（不義）の裁きを通してではなく、ご自身のしもべに負わされた罪の裁きによって成し遂げられるという預言の成就でした。その義は、しもべの苦難の道を通して神の栄光へと至る神の逆説的な方法です。

1. ヨハネの洗礼と義の実現

ヨハネは悔い改めの洗礼を通して、神の国の秩序への回復を告げました。

主イエスが洗礼を受けた際、「今は、こうするのがふさわしい。わたしたちがすべての義を実現するために」（マタイ 3:15）と語られました。これは、神の義がしもべの従順によって地に現れることを意味します。

2. しもべの苦難：イザヤ 53 章との連関

イザヤ 53 章では、「彼は、私たちの咎のために碎かれた」「彼の打ち傷によって、私たちは癒された」と語られます。この苦難は、神の義を人間の罪のただ中において実現する道であり、神の栄光が苦しみの中に現れる逆説です。

3. 誘惑の言葉のパラドクスと義の道

「この石にパンになれ」「この国々の栄華を与えよう」「神殿から飛び降りよ」——これらの誘惑は、義の実現を神の方法ではなく、人間的な方法で実現させようとする提案でした。主イエスはそれらを拒み、十字架という苦難の道を選ばれたことによって、神の義をしもべの道を通して完全に成就されるのです。

神の栄光：苦難の先にある輝き

イザヤ 53 章で、「主の望まれることは彼の手によって成し遂げられる」「彼は苦しみの実りを見、それを知って満足する」と語られ、苦難のしもべが神の栄光の器となることが預言されています。

ヨハネの「義の実現」の理解は、主イエスが誘惑を拒み、十字架の道を歩まれたことと深く結びついています。そしてその道の先にあるのが、神の栄光の現れと、贖われた民の命の回復です。

申命記のことばにより誘惑を退けられた主の応答は、神のみ言葉の引用により誘惑の拒絶として勝利されたという視点のみではなく、贖いの働きの霊的基盤として主御自身の認識としてはっきりと提示されたことを示すものです。「神の言葉によって生きる」とは、神の御霊により神の国を実現すること。その義の実現に対して、苦難の道を主が通られることを明らかにされたのでした。

I. 第一の誘惑 「この石に、パンになれ」

主イエスは、民の飢えに即座に応える道を拒み、神の言葉によってのみ生きるしもべの道を選びました。その拒絶は、十字架において裂かれる御体として命のパンを与えるための、苦難を経る贖いの道の始まりでした。

霊に導かれて荒野へ（ルカ 4:1-2）

「イエスは聖霊に満たされて、ヨルダンから帰り、霊によって荒野に導かれ…」

バプテスマの後、聖霊に満たされた主イエスは、神の御心によって荒野へと導かれます。この荒野での試練は、イスラエルの 40 年の荒野と呼応しつつ、「新しいイスラエル」としての主の足取りを浮かび上がらせていることについてはすでに学ばれています。

ここには、神の働きが始まる前の霊的識別が明確にされています。主は荒野において、誘惑を受けられ、「父のもの」としての姿勢をさらに深めていかれました。

まず、4 章 3 節で悪魔が主イエスに語った「この石に、パンになれと命じてごらんない」というパン、また、この石とはなにか。誘惑は、単なる空腹の解消を目的とした問題ではなく、神の子としての使命と主御自身の歩みの方向、つまり主の食物が父のみ言葉に従うことであることの完全な証しとされた、御国と宣教の青写真です。

悪魔が語った「この石に、パンになれ」との言葉は、40 日間断食の後、極度の空腹状態にあり、荒野には食物がなく、石しか見えない状況での誘惑でした。これは、神の子としての力を自己の欲求のために使えというものと理解されます。しかし、キリストの使命において捉えるとき、民の飢えに即応し、救済者としての力を今すぐ発揮せよという提案ともとれます。

- 民の期待：荒野はマナの記憶が漂い、民は神の即時的な供給を期待する場所。
- 誘惑の本質：主が民の求めに応じ、「命を与える者」として立ち上がるよう求められること。
- 霊的誤導：御国の完成を、神の時と順序によらず、人間の欲求の満たしによって形づけることへの誘導。

「この石」「パン」とは何か：象徴的意味

物理的な石は、荒野の現実です。しかし、象徴にとらえると、石は命のない物質であり、パンは命を支える糧です。ヨハネが直前に語った「神はこの石ころからでもアブラハムの子孫を起こすことができる」(ルカ 3:8)は、悔い改めない形式的な民衆を“命に連なっていない存在”として象徴した言葉でした。

この石は、神の言葉を宿していない者、命のパンを内に受け取っていない者の象徴と考えることもできます。「この石にパンになれ」と悪魔が語ったことの重みは、神の渇きに人が応答しない状況において、唯一命を持つ方が、その命を証しされる場面として読まれます。

パンとは—イエスご自身、満たす命の源

「人はパンだけで生きるのではなく、神の言葉によって生きる」(申命記 8:3、ルカ 4:4)という主イエスの応答は、神の言葉こそが命の源であると語られ、人を生かす真の満たしは神の言葉によって得られるというみこころでした。「人はパンだけで生きるのではない」と語られる時、その求められたパンとは即時的な満たし、しかし、神の言葉は命を生かす神の霊であり、神との関係でした。

そしてヨハネ福音書では、「わたしが天から降って来た命のパン」(ヨハネ 6:35)とイエス自身が語られ、満たす方がご自身であることが明示されます。

神の方法による逆説：「命じてパンになれ」という言葉の霊的展開

誘惑の言葉は、神の方法によってのみ贖いの後に実現する神の御計画でした。

主は「わたしは命のパンである」と宣言される(ヨハネ 6:35)。

命のパンは、贖いによって裂かれる主の体であり、苦難と十字架を経た後でのみ民に分け与えられます。つまり、拒絶された言葉が、神の時に霊的に成就される逆説の預言となっています。

この誘惑のことばが、パラドクスとなって、主ご自身の御霊の働きによって実現する側面もあります。いのちのなかった「弟子たち」が荒野で御子の言葉を受けて生ける者として立ち、遣わされて命のパン(を配る者)とされます。しかし、十字架の道が果たされるまでは、主は「わたしは渇く」といわれる孤独な働きをなさいます。誰も主のみこころの本質的な「われわれ」と言える同労者(※)ではありません。※(上から来たヨハネに対しては「すべての義を実現するのは私たちに相応しい」と語って、バプテスマを受けられた)

「わたしはかわく」—しもべとしての孤独な歩み

十字架上の「わたしは渇く」(ヨハネ 19:28)は、荒野における「満たしを拒絶したしもべの渇き」の頂点です。贖いが完了するまで、主には命を分かち合う弟子すらなく、同労者不在の孤独な霊的歩みが続いています。

しかし、ペンテコステの後、主の言葉を受けた弟子たちは、荒野のような世に遣わされ、命のパンを配る者となる。

この石ころからでもアブラハムの子孫を起こすことができる、そのように主はいのちのなかった者に、ご自身の肉を与え、神の言葉を宿した者から命が分け与えられます。ここに、神による誘惑の言葉の逆説的なみこころの成就があります。

第1の誘惑には、誘惑の言葉が「拒絶されながらも贖いの後に成就する」という展開が現れます。そして、その間に響く「主の飢え渇き」は、命の分配に至るまでにおいて、荒野で、主が感じられた主の孤独な忠誠の道です。

パラドクスとしての誘惑の言葉

3つの誘惑には、かつてエデンで真理の知識と永遠の命を得させる神の御計画と、それを人間の手で神を無視してつかませるサタンの欺きとがあったように、悪魔の欺きと神の救いの御計画との逆説的關係が存在しています。

(1) 「この石に、パンになれ」

主イエスは拒絶されたが、後に御霊によって生ける言葉を受けた弟子たちが、荒野のような世に遣わされ、命のパンを分け与える者となります。

(2) 「この国々の栄華を与えよう」

主イエスは悪魔の権威を拒んだが、十字架と復活によって「すべての権威は天においても地においてもわたしに与えられた」と語っておられます（マタイ 28:18）。

(3) 「神殿の頂から身を投げよ」

拒否された行為は、十字架上での自己を投げ出す愛として成就しています。そして死と復活という父から出た神の証しによって、真に「神が立てられた者」であることが証明されました。

悪魔の誘惑の言葉「この石にパンになれ」——は、神の力により即座に人の必要を満たす方法でした。しかし、主は拒み、神の御旨に従った時の中で命を与える道を選びました。この選択は、満たしを必要と感じられる最中で、神の言葉によってだけ生きるという誓願にも似た忠実さの表れです。

メシア的働きをこの世の方法で、短絡的に手に入れよという欺きに対して、主はそれらを拒絶しつつも、苦難と十字架の道によって神の方法で成就されます。石をパンに変えるとは、神の権能の奇跡によって命なきものから命を生み出す創造行為です。もとより、いのちの言葉なる主が、霊的な神のみこころの為される本意において新しいいのちの人を起こすために世に来ておられたのです。しかし、誘惑の言葉は、これを、苦難を経た贖いなしに達する道として提示しました。

「主の口から出る言葉」は、創世記における天地創造の言葉と同じく、命を生み出す力です。主イエスは、神の奇跡の行為によってではなく、神のことばによって生きる道、人を生かす道を選びました。（「わたしの言葉は霊であり命です」）

主イエスは荒野でパンを生み出す奇跡を拒みながら、やがて、十字架の裂かれた御体を通してパンを裂いて与える者となり、弟子たちに命を分け与えました。弟子たちは主の言葉によって養われ、ペンテコステの時に至って、聖霊による同労者として主の命の分配に与かる者とされます。「この石に命じて得られるパン」ではなく、贖いの道の先に得られる霊的食物と交わりこそが、主御自身のお建てになる御国であり、神の国の完成へと向かう神の集会の土台でした。

主が荒野で申命記の言葉を引用されたのは、神の言葉によってのみ生きることを選ばれた「しもべの姿勢」の表れです。

荒野で求められるパン：民の生活的救済への希求

荒野はマナが与えられたところであり、人々が現実的救いを求めた場でした。悪魔は、「あなたこそ、彼らの望むメシアとして、今すぐその満たしを与えよ」と迫ります。神のことを思う動機よりも、人間の望みに応答する即時的なメシア像へ誘います。主は「父の御心の成就」のみによって人を生かす道を選ばれたのでした。

ヨハネ 6 章で「わたしが天から降ってきた命のパンである」と語られたとき、そのパンは、世に命を与える主ご自身の肉そのもの（贖い）でした。荒野で悪魔が語った「今すぐパンを与えよ」という言葉は、贖いを省略した全うしない救済の道です。この悪魔のことば

は、後に、人々が主イエスに王となってくださるようにと求めた願いの中でもあらわれていきました。その時も、主は退けられます。「彼らがわたしを探して求めているのは、ただパンを食べて満腹したからです。」

主が拒絶された理由は、命の満たしは、苦難の道を通して御自身が差し出されることによってのみ得られるからです。荒野において、人の願いではなく、父の願いに従う選択をされました。命のパンは、「この石に命じて」ではなく、「御自身の命を裂いて与える」ことによって初めて成立するものでした。だからこそ、荒野での拒絶は、時を経て与えられる神により成される、人の命のための主の道であり、神の国が実現するための必ず通らなければならないメシアの道でした。

Ⅱ. 第二の誘惑 「権威と栄華を与えよう。拝むなら」

主は、民の支持によって即位する道を拒み、父なる神にのみ仕えるしもべとして、拒絶と死を経て王権を受ける道を選びました。その拒絶は、十字架と復活によってすべての権威を与えられるという、神の方法による支配の成就を証するものでした。

——「この国々の権威と栄華をすべてあなたに与えよう。わたしを拝むなら」——

これと同じ観点で、2 つめの誘惑があります。御国の完成を、贖いと苦難の道を経ずに得よという誘惑として捉えられます。

民の望みに応じよ

イスラエルの民は、ローマの圧政からの解放を願い、力と支配を持つ王としてのメシア像を求めていました。悪魔は「この世の国々の栄華を与えよう」と語り、主イエスに支持を失うことなく、民の望む救済者像を即座に担う」ことを誘惑して、民衆の願望を即座に叶えさせようとしします。

第一の誘惑と同様に、これは人間の求めによってメシアの姿をしめすというものであり、民心の掌握によって御国の支配を形づけるという誘導です。

礼拝の目的の反転：栄光のすり替え

悪魔は「わたしを拝めば」という礼拝を交換条件として提示しました。

サムエル記には、「見よ、聞き従わないことは偶像崇拜の罪」(1 サムエル 15:23) とあります。

「悪魔を拝む」という誘惑の意味

「わたしを拝めば、これらすべてを与えよう」という誘惑は、ただサタンへの忠誠を求めているように見えますが、聖徒であれば、このようなことは誘惑とはなりえません。容易に拒絶できると思います。しかし、この誘惑の深層は、民を恐れて神の働きを人心に合わせることであり、まさに「悪魔を拝む」とはその類のことです。民の求めを優先し、人の願いに応じて神の働きを形づけることが誘惑の表れとして確認することかできます。神の方法ではなく人々の期待するメシア像が優先されることになります。

これは、人間の称賛や支持を失うことへの恐れが、霊的中心の座を侵す状態です。ちょうどサウルが偶像崇拜の罪を指摘されたことが重なります。偶像崇拜とは、サタンを拝むことです。彼は、「民が自分から離れることを恐れて、自分自身で神にいけにえをささげた」のでした。そこでは、見えるところでは偶像にいけにえをささげたではありません。神にささげていたのです。しかし、主は、偶像崇拜の罪がそこにある、と言われました。悪魔にひれ伏して拝んだ形がそこにあったわけではありません。神の業を民の求めに応

じて、民の心が自分に向くために為される、そこに神の業があるはずなのに、偽善の偶像崇拜の罪が認められるのです。——「私(悪魔)を拝みなさい」と。

主はこの誘惑を申命記の言葉で拒まれました。——「あなたの神である主を拝み、ただ主に仕えなければならない」(申命記 6:13)

民の願望よりも、父なる神の御心に従うことに忠実であられるしもべの姿があります。御国の完成は、人の心を満たすことによってではなく、神の栄光によって成し遂げられるという主のご認識です。主は、人気や支持によって王となる道ではなく、贖いと犠牲を通してのみ民を救われる「拒絶の道」を選ばれました。

この拒絶はナザレでの排斥(ルカ 4:29)にもつながり、神の国の完成は、民の承認ではなく、御父の時によって実現することが示されることになります。ここにも神の方法による逆説が表れます。

御国の支配はキリストの苦難の道を経た後に与えられる

主イエスは悪魔から渡される権威(この世の支配権)を拒まれましたが、後に、十字架と復活を経て「すべての権威は天においても地においてもわたしに与えられている」(マタイ 28:18)と語っておられます。

荒野で拒絶された提案は、贖いを経ることによって、御父の主権においてキリストに渡されることになります。

黙示録 13 章の「獣」は、民の願いに応じて奇跡と権威によって支配し、「立つべきでない場所」に立つ存在です。第二の誘惑は、このような偽りの支配構造を打ち立てる者への警告ともなり、主の拒絶されたことによって、真の支配がどのように到来するかを示します。キリストは、人心の願望に基づく即位を拒み、贖いと死を経て、御父によって、いのちの君として、御座に着座される主権者となられました。

Ⅲ. 第三の誘惑：神の子として証明せよ

主は、奇跡による自己証明を拒み、神の守りを試すことなく、父の御心に従うしもべの道を貫かれました。その拒絶は、十字架の死と復活によって、神の子として証されるという、苦難を経た顕現の道を開くものでした。

これまでとおなじく、民の求めと主の使命に関係します。

神殿の頂に立たされた主

悪魔は主を神殿の頂に立たせ、「ここから飛び降りよ」と迫りました。神殿はユダヤ人にとって神の臨在の中心であり、その頂は至聖所に最も近い場所と見なされました。メシアが神殿に現れるという期待はマラキ書にも関係しており、外典や終末思想の中には「メシアが神殿の頂に立つ」との描写さえあります。もし主がそこから飛び降り、無傷で着地するなら、それは劇的な自己証明となり、民の喝采を得ることができたはずですが、これは「見せてくれれば信じる」というユダヤ人の欲望を代弁する誘惑であり、神の子を「証明すべき存在」として扱うものでした。誘惑の本質は、神の臨在の場所を舞台として用い、自らを民の信頼にふさわしい者として提示することにあります。

主の応答とマサの記憶

しかし主は、「あなたの神である主を試してはならない」(申命記 6:16)と応答されました。これはマサで民が「主は我々の間におられるのか」と問い、奇跡による臨在の証明を

求めた不信仰を再演しないという選びでした。主は、神の子としての証明を民の望む奇跡によってではなく、父の御心に従うしもべの道を通して成し遂げられました。その拒絶は、十字架の死と復活によって、神の子として証されるという、苦難を経た顕現の道を開くものでした。すなわち、神の大能の御力により、父なる神ご自身が主を復活させることで、神の子・メシアとしての正当性が証されるのです。

ゲッセマネとゴルゴタに響く誘惑

この誘惑のことは、後のゲッセマネにおける「この杯を取り去ってください」という祈りと、「しかし、あなたの御心がなりますように」という従順に重なります。また、ゴルゴタで「神の子なら十字架から降りてこい」と嘲られた声とも通じます。いずれも、神の子を奇跡的な自己顕現によって証明せよと迫る声でしたが、主は耳を貸さず、死に至るまで従順を貫かれました。そして父なる神が、大能の御力によって復活させることで、その正当性を公に証されるのです。

荒野の誘惑と十字架の嘲笑の並行

荒野の誘惑とゴルゴタの嘲笑は互いに同類です。荒野では悪魔が「あなたが神の子なら、飛び降りよ」と迫り、十字架上では民や祭司たちが「神の子なら、自分を救ってみよ」「十字架から降りてこい」と嘲りました（マタイ 27:40、ルカ 23:35）。どちらも神の子を「自分の力で救いを遂行する者」として証明せよと求めました。しかし主は、神の方法——杯を飲むことによってのみ救いが成る——を選ばれました。

反キリストとの対照的顕現

神殿から飛び降りるという誘惑は、黙示文学的視野において反キリストの顕現と対照をなします。主が拒まれた「神殿の頂からの飛び降り」は、やがて「立ってはならない場所に立つ者」（マルコ 13:14）と呼ばれる存在の姿と対照的です。これはダニエル書の「荒廃をもたらす憎むべきもの」（ダニエル 9:27, 11:31, 12:11）と関連し、神殿において神以外の栄光が宣言される時を示しています。この「立つ者」は、神の方法ではない力と自己顕現によって民を支配しようとする姿を現し、黙示録 13 章の獣の自己神格化とも重なります（中間時代のアンティオコス・エピファネスの事件）。ダニエル書と並行して読むなら、神殿の翼・頂とも関連し、悪魔が語った言葉に対応しています。

神の子の真の顕現

第三の誘惑において主は、「神を試してはならない」と語り、神による証明のみが正当な顕現であることを選ばれました。悪魔の言葉は「苦難なしに栄光を得よ、贖いなしに神格を示せ」という誘惑でしたが、主はそれを拒み、十字架と復活によってのみ神の子として証明されるという神の道を歩まれました。

その拒絶によって、将来において「立ってはならない場所に立つ者」との違いが明確になります。反キリストは、民の欲望に応じて即時的な支配と平和を約束し、自らの正当性を装います。しかし主イエスキリストは、父の御心に従い、苦難と定められた時を経て、真の平和と永遠の御国を成就されます。

こうして第三の誘惑は、「神の子なら証明してみよ」という民の声を代弁する悪魔の言葉であり、主はそれに対して、神の子とは父の御心に従う者であり、神を試す者ではないという霊的姿勢を示されました。奇跡による即時的な顕現ではなく、十字架と復活による父の証しこそが、神の子の真の顕現なのです。

終章：渇きの中に響く約束—贖いの逆説から栄光の完成へ

荒野での三つの誘惑の拒絶は、しもべとしての苦難の道を通してのみ御国が成就されることを示すものでした。主は、民の期待に応える道ではなく、神の誓願に従う

道を選ばれ、その渇きの中で命のパンを裂き、弟子たちへと命の分配を継承されました。

三つの誘惑と神の逆説的成就

誘惑	民の求め	主のことば	成就の道
石をパンに	即時の満たし	人は神の言葉によって生きる	主ご自身が命のパンとなる
栄華を与えよ	即時の支配	ただ主を拝み、主に仕えよ	十字架と復活による王権
飛び降りよ	即時の証明	神を試みてはならない	苦難と復活による証し

主イエスが荒野で拒絶された三つの誘惑は、奇跡や支配によって民の期待に応える道を示していました。しかし、それらを退けることで、主は御国の完成が、御父の命令(神の方法と時)によってのみ果たされる道であることを宣言されました。

第一の誘惑では、命のパンは即座には与えられず、主が「わたしはかわく」と言われる孤独の中で、十字架を通して初めて裂かれた体として与えられることとなりました。

第二の誘惑では、支配は民心によってではなく、拒絶と死を経て父なる神から与えられる「すべての権威」によって成されました。

第三の誘惑では、神殿からの自己顕現は拒まれ、代わりに「私たちの罪のために黄泉にくだり、神の全能によって甦らされる(立たれる)」ことによって神の子として証されました。

これらの逆説的構造は、主がしもべとして、苦難の道を経ることなしに神の御国を打ち立てることがないという、唯一の神の方法を証しています。

人間の求めに応じるのではなく、神の誓願によって歩まれるしもべの道。この道をたどることで、贖いは完成され、弟子たちは命のパンを配る者として遣わされることとなります。荒野の誘惑の拒絶こそが、神の国の始まりといえます。

荒野の誘惑は、御国の成就をどのように形づけるか、そしてそのために主がどのようにしもべの道を選ばれたかという宣教の起点です。

御国の成就との連関

三つの誘惑は、いずれも「即座に」「民の期待に応じて」「奇跡的に」御国を形づける道への誘惑でしたが、それに対して主はすべて拒絶されます。それはすなわち、

- 御国は人の望みからではなく、神の方法によって完成されるべきもの。
- 神の国とは、礼拝の秩序と贖いの順序に従って、神の言葉と神の愛(キリストの苦難)によって建てられるものであるということです。

宣教との起点的關係

荒野での拒絶がなされなければ、宣教は民に迎合する力の宣言になってしまいます。その広がり、神の業としての形式をなぞる偽善となり、呪いの結末となります。神の霊的な真実と永遠の祝福は、上からでなければ得られないものですが、それを肉によって地において得ようとするからです。

- パンを与える奇跡 → 民の即座の満足
- 栄華の支配 → 権威による強制的統治
- 神殿からの顕現 → 演出された信仰

それらの道を拒むことで、主は宣教を「しもべとして」「父の御心に従い」「福音を宣べ伝える」方向へ定められました。つまり、荒野の誘惑は、十字架から宣教までの全体構造の根を形づける場であったと言えます。

「わたしは渴く」の言葉は、荒野の拒絶の延長であり、神の言葉によってのみ生きるしもべ「命のパンを与える者」しもべの姿が、ペンテコステ以降に弟子たちへと「パンを配る者」へと継承される流れへ続いていました。この線貫いて見つめることで、荒野の誘惑そのものが御国と宣教の青写真であったという理解することができます。